

ポケットモンスター The Rebellion of fate

天羽々矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、1人の男によって世界を壊された者の復讐の物語。
彼は全てを奪った存在を憎み、また友は彼の為に力を振るう。

※（10／10）タイトルと主人公の名前を変更しました。

目次

プロローグ	夢現	嵐の夜に（前編）	1
プロローグ	夢現	嵐の夜に（後編）	4
第1話	脱獄	憎しみと共に	7
第2話	統制管理局		11
第3話	クロガネ	アルト	16
第4話	海門要塞	地を護る砦	22
第5話	要塞攻略（前編）		26
第6話	要塞攻略（後編）		30
第7話	覚悟		34

プロローグ 夢現 嵐の夜に（前編）

夢を見ていた。

青年の父親と母親が死に、義兄と妹と3人で密かに暮らしていた夢を。

その日、1人の青年と1人の少女が緑生い茂る森の奥地にある場所に足を運んでいた。

そこはまるでこの世にあるとは思えない程に澄んだ湖だ。

青年が大声で叫ぶと、2人の前に戦闘機のようなフォルムをした2体のドラゴンのような生物が姿を見せる。

それはこの世界で「ポケモン」と呼ばれている生物で、2体はその中でも伝説と言われている「ラティアス」と「ラテオス」だ。

2人はラティアスとラテオスが来たのを見ると、ボールの形をした物、モンスターボールを投げる。

青年のボールから出てきたのはヤモリのような姿をしたポケモン「キモリ」、少女のボールからはカラフルな羽のアゲハチョウのようなポケモン「アゲハント」だ。

2人はある日、ふとこの泉で傷つき倒れていたラティアスを見つけ手当した。その時にラティアスを探していたラテオスに誤解され襲われるもラティアスが説得するような行動をし、今のような関係にいたる。

2人とポケモン達は泉の辺で日が暮れるまで遊び、分かれる際にラティアスが少年の服を噛み、寂しそうにしていた。それが彼らの送った日々だった。

・・・だが、ある日を境にその日々は崩壊した。

「はっ・・・はっ・・・！」

嵐の中、少年が息を切らしながら森の中を走る。

青と黒の髪、グレーのシャツと黒いジーンズを濡らしながら、豪雨

の中をとにかく速く走る。

「何処だ・・・ヨゾラ・・・兄さん・・・！」

妹と兄をひたすら探し、少年は森を走る。

やがて森を抜け、大きな穴のある岬に着く。そこには1人の少女と1人の男性がいた。

少女の方は淡い茶色のグラデーションがかつた赤茶色のウェーブしたロングヘア、赤いブレザー型制服風の服を着ている。男性は長い金髪、シャツもズボンも黒で、さらに黒いロングコート。

「ヨゾラ！シグレ兄さん！」

「・・・アルト」

兄と呼ばれた男性シグレは少年、アルトの方に向くがその声には全く感情が無いように聞こえた。

「よかった・・・、ヨゾラも兄さんが守ってくれたんだな！」

「・・・」

しかし少女、ヨゾラの瞳には光が無い。

「え？どうしたヨゾラ？俺と兄さんと一緒に帰ろうぜ？」

「・・・」それ〃はもうヨゾラじゃない」

無言のままのヨゾラに戸惑うアルトに、シグレが呟くように冷たく言い放つ。

そしてヨゾラに顔を向ける。

「・・・アルトを排除しろ」

「・・・」

シグレの命令に等しい言葉にヨゾラは頷き、モンスターボールを2つ同時に投げる。

それから現れたのは、

「サーナ・・・」

「ライゴオオオン!!」

「サーナイトとフライゴン!?ヨゾラの手持ちじゃない!？」

「そうだ。俺が与えた」

サーナイトとフライゴンの登場に驚くアルトにシグレが冷たく言い放つ。

それを見て歯ぎしりをしたアルトはボールを構えるが、はつきり言えば今の彼の手持ちではあの2体とバトルするなど無謀に等しかった。

「(でも、迷ってられない!)頼む、キモリ!フカマル!」

「キヤモモツ!」

「カフツ!」

明らかに体躯もパワーも違うが、今の彼にはバトルする他に選択肢は無かった。

兄妹で“あつた”者同士のバトルが始まる。

プロローグ 夢現 嵐の夜に（後編）

ヨゾラ”だった者”のサーナイトとフライゴン、アルトのキモリとフカマルが豪雨の中対峙している。

先陣を切ったのはアルトだった。

「キモリ、サーナイトにはたくー！フカマルは体当たりだ！」

「キャモー！」

「カフー！」

アルトの指示に頷きキモリとフカマル。

キモリはサーナイトに、フカマルはフライゴンに向け走り出し攻撃の体制を整えるも、

「・・・ねんりき」

「サナ・・・」

ヨゾラの呟くような指示にサーナイトが短く鳴くと、目を光らせ右手を前に出す。

するとキモリとフカマルが青い光に包まれ宙に浮く。

「キャモー！」

「カフー！」

「しまった!?何とか逃げるんだ！」

どうにかねんりきから抜け出そうともがくキモリとフカマルだが力が強くビクともしない。

サーナイトが右手を振り下ろすと、キモリとフカマルも地面に叩きつけられる。

「・・・はかいこうせん」

フライゴンの口に光が集まり、

「ライゴオオオッ!!」

凄まじい威力が込められた光線が放たれ、

「キャモオオオッ!!」

「カーーーッフ!!」

キモリとフカマルを吹き飛ばす。

「キモリ!!フカマル!!」

「・・・エルレイド」

アルトがキモリとフカマルに駆け寄ろうとするが、シグレがモンスタールボールを投げ、エルレイドを繰り出す。

「エルレイツー！」

エルレイドは出た瞬間に腕の刃を刀のようにし、そのままダツシユしアルトに接近する。

「っ!？」

反応が遅れたアルトは瞬時の出来事に対応できず、

「レイツ!!」

エルレイドはアルトの右下腹部から左胸部を斬り上げる。

「があっ!!」

アルトは飛ばされそのまま地面に落ちる。

その様子を見たシグレはアルトにゆっくりと近づき、喉を力を込めて握り持ち上げ、冷たく言い放つ。

「安心しろ、お前だけじゃない。世界の悲劇は俺が・・・、ユリウス・シツクザールが止める」

「・・・兄・・・さん」

首を絞められ、更にエルレイドに切り裂かれ流血し続けている腹部のダメージから、アルトの意識は朦朧としていた。

「許さなくていい。全ては俺の罪だ」

「・・・」

最早言葉を口にする体力も気力も無く、アルトは力無しに腕を垂らした。

「キヤモ・・・!」

「カフ・・・」

その光景を見たキモリとフカマルも既に满身創痕で身動きが取れず、ただ眺めるしかなかった。

「キヤモ・・・」

キモリがアルトに、ごめんと言いたげに一声弱弱しく鳴き、2体は意識を失った。

その時、戦闘機に似た姿を持つ2体のあるポケモンは豪雨の中を飛んでいた。

それは、ラテイアスとラテイオスといった。

豪雨の中で飛び続けるのはかなり体力を消耗するが、それでも2体、とくにラテイアスは行かなければならなかった。

そして見つけた。自身が慕っている少年。

・・・血塗れた状態のアルトが。

「クウ!?クオオウウツ!!」

ラテイアスが驚愕し、アルトの下に近づこうとするが、

「ウオオオウー!」

前に割り込んできたラテイオスに止められてしまう。

「クウウウツ!」

「ウオウウオウー!」

ラテイアスに向け首を横に振るラテイオス。おそらくは無駄だと言いたいのだろう。

そして、アルトは近くにいた男が繰り出したポケモン「ボーマンダ」によってどこかへ連れて行かれてしまった。

それを見たラテイアスも追おうとするも、これもラテイオスに止められてしまい、ただ眺める事しかできなかつた。

「・・・クオオオオオウツ!!」

その夜、豪雨の森には涙を流していたラテイアスの悲しげな鳴き声が響いた。

第1話 脱獄 憎しみと共に

こうしてアルトは凶悪犯として捕まり、アルトは自分から大切な物を奪った者、シグレことユリウス・シツクザールに復讐する事を誓った。

いつか必ずユリウスを捜しだす。そう決めたアルトは囚われた牢獄の中で、ただひたすらに自分を鍛えた。

妹を、そして自分の全てを奪った存在、ユリウスを殺す為に。

エヴァン地方と呼ばれるこの地の、更に絶海に位置する孤島に設けられた特別監獄。

囚人達からは「監獄島オルデイン」と呼ばれているこの島に一つの透明な影があった。

それは戦闘機に似た姿、ラティアスだ。

彼女は1年前、ある男のボーマンダに連れて行かれたナオトを今でもずっと捜していたのだ。

「クウウ・・・」

悲しげな声で鳴きながら、島の周囲を飛び回るラティアス。

「クウ？」

その中で1つ目に入った物がありラティアスが止まる。

「フッ！」

その中にいたのは、自分が捜していたアルトその人だった。

しかし今のアルトの瞳には光が感じられなく、右手には壁の石を削って作ったナイフが握られており、それを突きや斬りつけといった動作で振る。

「クウウ・・・」

ラティアスはナオトに声をかけたかったが、牢獄の外からでは声も届かない。

そこでラティアスは島の表側に周り出入り口を探す事にした。

「ぐっ……！」

鍛練による疲労からかアルトは身体をふらつかせその場に座り込む。

この1年、彼は無理に自分を痛めつけてきた為に疲労はピークに達していたのだ。

そのまま床に寝転び眠りに就く。

「……？」

突然外に気配を感じ、目を覚ましたアルトは牢獄の外を見る。

そこにいたのは、淡い茶色のグラデーションがかかった赤茶色のウェーブしたロングヘア。紫色の瞳でモデルのような整った顔立ち。そして赤いブレザー型制服風の衣服。

その姿を、アルトは見間違えるはずもない。

「……ヨゾラ……!?!」

まさかの人物の登場にアルトは驚きを隠せない。

1年前にユリウスが連れていったアルトの妹、ヨゾラだ。

「どうして……」

「っ……！」

するとヨゾラは涙を流しながらアルトに抱き付いた。

その身体は震えていた。

しかしそのおかげか、アルトには分かった。

「……ラティアス？」

アルトの問いにヨゾラ……と瓜二つの姿の少女は顔を上げ頷く。

「どうして……」

アルトが何故自分の居場所が分かったのかラティアスに聞くが、ラティアスは牢獄の窓の方を見る。

それでアルトは理解した。ラティアスは地方中を飛び回り、自分を捜してこの窓から自分を見つけたのだと。

「キャモ！」

「カフー！」

突然足元から鳴き声が聞こえた。

足元を見ると、そこにはアルトのポケモンであるキモリとフカマル

がいた。そしてキモリは鍵を持っている。

「・・・お前達・・・」

「キヤモキヤモ！」

キモリが牢獄の格子に登り、持っていた鍵を使い牢獄を開ける。

そしてアルトは牢を開け外に出る。

「キヤモ・・・」

「カフ・・・」

キモリとフカマルは主人であるアルトに近寄る。

するとアルトはヨゾラの姿をしているラティアスに目を向け、

「・・・ラティアス、お前は帰れ」

「っ・・・!?!」

アルトの冷たい声にラティアスは一瞬も震える、すぐにアルトに抱き付き拒否の意を示す。

「帰れっ!!」

遂にアルトは怒鳴り、その剣幕にラティアスはたじろいでしまう。

少ししてアルトは落ち着きを取り戻し、

「悪い・・・」

ラティアスに謝る。しかしアルトが厳しい態度を取るのには理由があった。

「・・・お前が来る必要は無い。俺はあの男を・・・ユリウスを殺す」

冷たく言うアルトに、ラティアスはポケモンの姿に戻り、

「クウウ・・・」

悲しげな声と涙を流し、ゆっくりとアルトから離れていく。

アルトもラティアスに背を向け歩き出し、キモリとフカマルは主人についていく。

そしてラティアスはその場で消えていく。

アルトは自分の復讐の為にラティアスを巻き込みたくなかったのか、はたまた単に邪魔になるからだったのか、その真意は彼にしか分からない。

その様子を見たアルトは歩みを進める。

「ワウ・・・」

「キヤモ」

突然後ろから鳴き声が聞こえ、アルトは後ろを向く。

そこにいたのは犬のような青いポケモン、リオルだ。

どういう訳かりオルはキモリについてきている。

そしてアルトに対し警戒心かそれと怯えているのか身構えている。

「・・・」

アルトは特に気にする素振りを見せず、そのまま歩いていき、キモリとフカマル、

「ワオウ！」

そして何故かりオルもついて行く。

第2話 統制管理局

牢獄から出たアルトは、まず保管庫のような部屋に向かった。

自分が脱獄したとなれば、相手は死に物狂いで自分を捕えようとするはず。そうなればポケモン達だけでは守り切るのは難しい。

自分の身を守り、生きて仇を、ユリウスを殺す為には道具が必要だ。囚人から没収され保管されている道具、その中でアルトは自分のモンスターボールとボールホルダーを取り戻し出発しようとした時、1つの物に目が行った。

「・・・すごい剣」

アルトが取った一振りの刀に近い剣。

護拳付きの柄に回転式弾倉が組み込まれた黒い長刀だ。

アルトは鞘から剣を抜き軽く振るう。動作を確認したアルトは剣を収め、それを腰に差す。

「カフ・・・」

フカマルが心配そうにアルトを見つめる。が、アルトは気にした様子を見せない。

「心配無い。今は没収されてここに置かれてるから誰の物でもない」

つまりは今は持っている自分の物だと言いたいのだろう。

そしてアルトは今着ているグレーのシャツと黒いジーンズに、更に黒いロングコートを羽織る。

「何をしているー！」

そこに槍を持った兵士が現れ、槍を構えるが、

「キャモオー！」

「カフー！」

キモリとフカマルが兵士に体当たりをし、よろけた隙を突きアルトが帯剣したままの剣で兵士の腹部に突きを食らわす。

その威力は溜まったものではなく、兵士は昏倒した。

「時間もそこまで余裕は無いか」

アルトはそう呟くように言い、その場を後にする。

外は看守や兵士だらけ、更にトレーナーまでいるかもしれない、し

かしそれでもアルトは止まる訳には行かなかった。

そこで警備の注意を引く為に別の牢獄を目指す。

そこには人間を嫌う凶暴なポケモンや囚人が多数収監されている。それらを解き放てば混乱が起こり、自分達に向く目が少なくなると考えたのだ。

そしてアルトは牢獄を見つけた。そこにはサザンドラやバンギラスのような凶暴なポケモンは勿論、多数の囚人も収監されていた。

アルトはまだ鍵を持っているキモリに目を向ける。

「キヤモキヤモ」

目を見ただけでアルトの意図を理解したキモリは壁を這い次々と牢獄の鍵を開ける。

そして牢獄に入っていた囚人、ポケモン達が次々と外に出る。

「・・・俺達も行くぞ」

アルトがそう告げ頷くキモリとフカマル、リオルは躊躇っているのか頷かないが、それでも彼について行く。

しばらくし、外からは看守と脱獄した囚人、ポケモン達が乱闘を始める音や声が聞こえ出す。

その隙を突きアルト達は警備を欺き外へ出る事に成功する。

だがそこで、オルディンに向かう一隻の船を発見する。その事から、派遣されたエリートだという事はアルトでも容易に想像できた。

「・・・それでも関係無い」

呟くように言うアルトにポケモン達がアルトに顔を向けるが、気にした様子を見せずに歩み続ける。

オルディンの港に船が停泊し、多数の兵が直立になる。

「楽で大丈夫ですよ」

そんな声を発しながら船から降りてきたのは、1人の赤髪の青年。白いロングコートに赤のシャツ、赤褐色のズボンだ。その手には槍が握られている。

そして青年の正面に、高台から飛び降りたアルトが降り立つ。

「貴方が脱獄した凶悪犯ですか」

青年はアルトにそう言葉を放つも、アルトは無言のままだ。

「沈黙は肯定と受け取ります。でも礼儀ですのぞ」

そう言つて青年は槍の柄を地面に着ける。

「僕は統制管理局、特務機動課のエリオ・アレクセイ。そちらは？」

青年、エリオはアルトに名前を問うが、アルトは無言のまままで返答しない。

「・・・分かりました、黒の凶悪犯と呼びましょう」

そう言い、エリオはベルトのホルダーからモンスターボールを取り出す。

エリオが口にした「統制管理局」は、このエヴァン地方における治安維持組織だ。

凶悪な事件に対しての武装隊も保有しており、警察、軍隊の役目も有している。

そしてこの統制管理局と提携している「聖導教会」なる組織も存在する。

「ユリウス筆頭の命により、貴方を拘束します！」

エリオはそう言葉を放ち2つのモンスターボールを投げる。

そこから現れたのは、

「キル！」

「グオオオ!!」

キルリアとリザードン、どちらも強力なポケモンだ。

「キャモキャモ！」

「カフ！」

エリオのポケモンを見て、キモリとフカマルは臨戦態勢に入る。

「キモリ、でんこうせっか！フカマル、たいあたり！」

「キャモオ！」

「カフツ！」

アルトの指示に従いリザードンに突撃するキモリとフカマル。

「リザードン、かえんほうしゃー！」

「グオオオオオ!!」

エリオの指示を受け、リザードンが口から灼熱の炎を吐く。

キモリとフカマルはギリギリで回避するも、まだキルリアが残っている。それを見逃すエリオではない。

「今だ、キルリア、フカマルにれいとうパンチ！」

「キルツ！」

指示を受けフカマルに向け走り出すキルリア。

「キャモ！」

「キルツ!？」

しかしそこでキモリがフォローに入る。

はたく攻撃でキルリアにダメージを与え、技を解除させる。

しかしそれが致命的な隙となった。

「リザードン、ブレイズキック！」

「グオオオオオ!!！」

「キャモツ!？」

その致命的な隙を見逃さず、リザードンが炎を纏った蹴りをキモリに叩き込む。

「キャモオオオツ!？」

「カフツ!？」

「しまった!!！」

蹴り飛ばされたキモリはそのまま海へと落ちる。

これでアルトに残されたのはフカマル1体のみだ。

「おとなしく戻っていれば、キモリを犠牲にしませんでしたよ。これでも続けますか？」

挑発するようにエリオが言うが、アルトにはその言葉は届いていない。

そう、この男に負けるようでは先に進んでも意味がない。

全ては妹の仇、ユリウスを殺す為だ。

海底に向け沈んで行くキモリ。

遠のいていく海面を見て、————自分が情けなくなり、憤りさえ感じてくる。

キモリとアルトは小さい頃から共に育ってきた兄弟のような物。彼の悲しみも理解できた。

アルトは1年前にヨゾラという大切な存在をユリウスに奪われた。彼はもう十分に傷ついた。これ以上傷つく必要は無い。・・・だがこの様は何だ？

自分は何をしている？このまま沈んでいくのか？

——力が、欲しい

——彼の目的を・・・復讐を果たしてやれる力が

——彼を・・・アルトを悲しみのどん底に突き落としたあの男を殺せる力が!!!

「キャモ・・・キャモオオオオツ!!!
全力の雄叫び。」

そして、その時は訪れた。

——その瞬間、キモリの身体が光り輝いた。

第3話 クロガネ アルト

海から白く輝く影が飛び出した。

「あれは!?!」

徐々に姿を変えていく影にエリオは驚愕の声を上げる。

その光の正体は、——進化。

キモリの力を望む意思がそれをもたらしたのだ。

キモリが再び地面に降り立つ時、その姿は完全に変わっていた。

「ジュール……」

それにキモリの面影は薄く、頭と腕に葉のような物がついている。

そのポケモンの名は、「ジュプトル」。

「お前……」

「ジュール」

アルトもキモリの進化に驚いているが、ジュプトルはアルトを見て笑いかける。

その姿にアルトも軽く笑みを浮かべ、ジュプトルと共にエリオと再び対峙する。

「進化するような強力なポケモンを連れてくるなんて……、尚更貴方を逃がす訳にはいきません」

ジュプトルへの進化を目撃したエリオはアルトへの敵対心を強める。

進化したポケモンを連れてくる凶悪犯など、脅威以外の何物でもない。

だがその中、指示以外は閉ざされていたアルトの口が開く。

「俺は……あいつを殺す為に生きてきた。来る日もずっと、如何なる理由であろうと」

「それが憎いなら間違いです。それが貴方の役割です」

否定するようにエリオが反論するが、アルトの脳裏に“あの日”の記憶が甦る。

「ヨゾラを……、俺の妹の意思を消したようにか!?!」

「そう。誰にも役割はある。ユリウス筆頭はそれをこの地方に示しま

した」

アルトの怒鳴るような問いに当然のように答えるエリオ。

だがそれが逆にアルトの内なる感情を起こした。

「妹の……人間の意思と引き換えにした世界なんて……、俺は許さない……っ!!」

静かなる怒り。それはアルトの激情でもあった。

1年前にヨゾラがそうされたように、誰かの意思が奪われる事は、アルトにとっては許せなかった。

「……そうですか、なら、強行逮捕を執行します!」

エリオの宣言に答えるように、キルリアとリザードンが構え直し、ジュプトルとフカマルも再度臨戦態勢を整える。

「キルリア、サイコキネシス!リザードン、かえんほうしゃ!」

「ジュプトル、でんこうせっか、フカマルはあなをほるでかわせ!」

リザードンが口から灼熱の炎を吐き、キルリアは両目を光らせ両手を構える。対してジュプトルは更に速くなったスピードで炎を回避しリザードンに肉迫、フカマルは即座に地面を掘りその中に回避する。

そしてキルリアの背後の地面が陥没したと思ったらそこからフカマルが飛び出し、

「カーーーッ!」

「キルウツ!」

フカマルからかみつく攻撃を受ける。エスパークタイプのキルリアに、あくタイプのかみつく攻撃は効果抜群だ。

「ジュプトル行くぞ!リーフブレード!!」

「ジュル!!」

アルトの指示を受け、ジュプトルは両腕の刃のような葉を光らせ、

「ジュルウウウツ!!」

「グオウウウツ!」

リザードンを斬りつける。ほのおとひこうタイプを合わせ持つリザードンにはそこまでダメージは無いが確実に追い詰めている。

反撃を開始したアルトにエリオは少しずつ焦りを感じ始めていた

為、せめてアルトのエースでもあるジユプトルだけでも先に撃破すべく思考を巡らせた。

「リザードン、ブラストバーン!!」

エリオの指示に、リザードンは自分の口に炎の高エネルギーを収束し始める。

「グオオオオオツ!!」

リザードンの口から収束された炎エネルギーがジユプトルに迫る。

ジユプトルは自己判断で、でんこうせっかにより回避するが、

「ジユル!？」

炎が向かう先には・・・アルトがいた。

「っ!？」

アルトは意識が完全にバトルに向いていた為、咄嗟の判断ができなかった。

放たれたブラストバーンがアルトの至近距離に着弾し爆発、アルトを吹き飛ばした。

「が、あ・・・!!」

声にならない呻き声を出し、アルトは木製の扉を破り奥へ飛ばされる。

ジユプトルは茫然とし、攻撃を避けた自分を恨みながらも、不本意ながらアルトを攻撃したりリザードンを睨み付ける。

今の彼に、自分とこのリザードンを許す事はできなかった。

「ジユルウウウウツ!!」

ジユプトルはでんこうせっかとりーフブレードを同時発動し、リザードンに迫る。

「クウウ・・・」

そこはオルデインの広間。

そんな鳴き声が耳に届き、アルトは目を覚ます。

「ここは・・・」

「クオウウ！クウウ・・・」

目を覚ました瞬間、アルトにすり寄る1体のポケモンと、その傍らにいるもう1体。

その2体はアルトにはすぐ分かった。

「ラティアス・・・ラテリオスも・・・」

「ウオウ・・・」

静かにアルトに近寄るラテリオス。その態度でアルトは理解してしまった。

ラティアスは1度突き放された後、ラテリオスに自分の事を伝えラテリオスと共にこの島に来たのだ。

その様子にアルトは呆れたような顔をするが、そこには微かに笑顔があつた。

「バカだよ、2人揃って俺なんか・・・」

「クオウウ・・・」

アルトの言葉にラティアスは瞳に涙を浮かべながらも首を横に振る。

きつと「バカで構わない」と伝えたのだろう。ラテリオスもラティアスに賛同するかのよう頷く。

アルトは立ち上がり、ラティアスとラテリオスに向き直る。

「・・・2人共、ここを出る。力を貸してくれ！」

「クオウウウウツ!!」

「ウオウウウウツ!!」

「ジュルイイ・・・!!」

ジュプトルは完全に追い込まれていた。

怒りに我を忘れたあまり、ダメージが蓄積し身体が思うように動かなくなってしまったのだ。

今ジュプトルはリザードンのほのおのパンチと自身のリーフブレードとで鏝迫り合い状態だが、相性で劣っている上、体力も限界に近かった。

だが、そこで奇跡が起こる。

「グオウ!？」

破られた島の入口から、エメラルド色の光弾2つが飛び出しリザードンに命中し後退させる。

ジユプトルは訳が分からず、入口を見ると、

「ジュール!!」

そこには、吹き飛ばされたはずのアルトがいた。・・・ラティアスとラティオスを連れて。

「そんな・・・どうして、ラティアスとラティオスが・・・!?」

2体がいる時点で驚きだが、その2体がアルトに付いている事の方が大きい。

しかし、これで完全にアルトを逃がす訳には行かなくなった。

「・貴方のような奴を、世に放つ訳には行きません。キルリア、リザードン!!」

「キルウツ!!」

「グオウウウウツ!!」

エリオの掛け声に、キルリアは強力なでんきタイプの技「10まんボルト」、リザードンはブラストバーンを放つ。

「クウウ・・・」

「ウウウ・・・」

しかし、ラティアスとラティオスが目を光らせら瞬間、2つの技が静止する。

ラティアスとラティオスの「サイコキネシス」だ。

「何!？」

「・・・アルトだ」

エリオが驚愕する中、アルトが静かに口を開く。

「俺の名前、ユリウスに伝える。・・・管理局だろうと教会だろうと、邪魔するなら叩き潰す。俺は・・・クロガネ アルトだ!!!」

「クオウウウウツ!!」

「ウオウウウウツ!!」

アルトの言葉と同時にラティアスとラティオスが雄叫びを上げ、サ

イコキネシスで静止させていた10まんボルトとブラストバーンを撃ち返す。

「グオウウウツ!!?」

「キルウウウツ!!?」

撃ち返された10まんボルトとブラストバーンを食らい吹き飛ばされるリザードンとキルリア。

しかしそれでも合体した2つの技の威力は衰えず、2体を押しつめたままエリオに迫り、

「ひっ・・・うあああああつ!!」

エリオを巻き込んだ瞬間に大爆発を起こした。

外洋を航海する1隻の船。

アルト達がエリオに勝利し奪取した船がその海を進んでいた。

「ジュール・・・」

船の舵を取っているジュプトルが空を見上げ、微かに声を出す。

その雲行きは、まるで彼らの行手を阻むかのように悪くなり始めていた。

その中でアルトは立ち上がり、ジュプトルを始めとした同行メンバーに行先を伝える。

「進路を南東へ。エヴァンの首都ロサシテイを目指す」

第4話 海門要塞 地を護る砦

外洋を進む船、そこでアルト達は作業に追われていた。ジユプトルは舵を取り方角の確認。

フカマルは荷物の固定。明らかに人員が不足していた。

そんな中、甲板に座っているアルトに近づくラティアス。

「クウウ・・・」

悲しそうな表情を浮かべるラティアスに、アルトは静かに手を差し伸べようとして、・・・止めた。

アルトは1度ラティアスを突き放してしまった。そんな自分に再びラティアスに触れる資格なんて、無い。

そこにラティアスは、静かに顔を近づけ、気にしないでと言いたげにアルトの頬に頬を摺り寄せる。

アルトは辛そうな表情を浮かべ、ラティアスの頬に手を触れ・・・

バシヤアアアン!!

「何だ!？」

「クウウツ!？」

突然、水柱と共に船に大きな揺れが襲い来る。

「ウオオオオオウツ!!」

船の舳先にいたラティオスが大声を上げる。

ラティオスの目線の先を見ると、悪天候の影響ではつきりとはしないものの、巨大な壁のような物が火を噴き、アルト達へ砲弾を撃っている。どうやら敵と認識しているようだ。

しかも厄介な事に、壁はロサシテイへ通ずる道路が通っている港街への入口ともなる海峡を塞ぐように建っている。

別の港街からもロサシテイへは行けるが、外洋を大回りする為に大幅に時間が掛かる上、最悪遭難してしまう危険もある。

その考えに至ったアルトはジユプトルのいるブリッジへ走った。

「ジユプトル！舵を右へ、一旦陸に着けるぞ！」

「ジュルイー！」

ジュプトルも今の状況は飲み込んでいるらしく、アルトの指示を聞いた後すぐに舵輪を大きく右へ回し舳先を大きく右へ向ける。

その際に船が大きく傾き、船内倉庫でフカマルが転がっていたのは余談。

砲撃を回避する為に船を陸に着けたアルト達は、船をラテイアスとラテイオスに任せて壁に向かった。

アルトが考えた案は、少数で壁の内側に潜り込み、開けられるようであれば開放、不可能であれば内側から壁を破壊するといった物だ。

壁に入るのはアルト、ジュプトル、フカマルの3人のはずだったが、オルデインから共に脱走してきたリオルも同行する事になった。

壁に侵入できる経路としてアルトが考えたのは建設時に使われていたと思われる物資の搬入口。

あれほどの壁を建設するには外からでは限度があると考えたのだ。そして見つけた。

「・・・警備は2人」

警備兵の傍には恐らく彼らの手持ちであろうポケモン「グラエナ」と「コジョフー」が徘徊している。

それを見てもアルトはひるまずジュプトル、フカマルと共に警備兵の前に出る。

「何だお前は!？」

「悪いが、通してもらおう」

アルトがそう告げるとジュプトルとフカマルが前に出て身構え、警備のグラエナとコジョフーも臨戦態勢を整える。

「侵入者め、容赦はしないで! グラエナ、かみつく!」

「コジョフー、バレットパンチ!」

「グラウウツ!」

「コジョツ!」

グラエナとコジョフーがジュプトルとフカマルに迫るも、アルトは

冷静に指示を送る。

「ジユプトル、でんこうせっか、フカマルはりゅうのいぶきでフォローしろー!」

「ジュールイ!」

「カアアアフツ!」

「グラウツ!?!」

フカマルの口からエメラルド色のブレスが放たれ、ジユプトルに迫るグラエナを吹き飛ばす。

そしてジユプトルはコジヨフーの拳を至近距離で回避し、勢いそのままコジヨフーを蹴り飛ばす。

「コジヨツ!?!」

蹴り飛ばされたコジヨフーはそのまま壁に叩き付けられ膝をつくも、アルトとジユプトルは容赦しない。

「リーフブレード!」

「ジュールイ!」

アルトの指示を受け、両腕の葉を光らせコジヨフーを斬りつける。

「ジュールウウツ!!」

「コジヨオオオツ!?!」

コジヨフーはそのままトレーナーの下へ転がっていき、

「コジヨオオく・・・」

目を回しながら地面に倒れ込む。完全に戦闘不能だった。

「まさか・・・、たった数回の技で!?!」

でんこうせっかとしてリーフブレードでコジヨフーが戦闘不能になった事にトレーナー2人は驚きを隠せなかったが、それが致命的な隙になった。

「グラウウウウウツ!?!」

「なっ、しまった!?!」

グラエナの悲鳴に似た鳴き声で現実に引き戻されるも、グラエナはフカマルのたいあたりで弾き飛ばされ、

「りゅうのいぶきー!」

「カアアアフツ!」

再びフカマルから放たれるりゆうのいぶきがグラエナを吹き飛ばし、グラエナはそのままトレーナーの下に転がり、

「グウ〜・・・」

目を回し戦闘不能状態になる。

「ば、馬鹿な・・・」

トレーナー2人が啞然とする中、動いたのはアルト自身。

「はあっ！」

「ぐふうっ!?!」

一気に接近し回し蹴りを繰り出し1人を昏倒させる。

それに気づいたもう1人がアルトを取り押さえようとするが、アルトは後腰に差している剣を鞘ごと取り腹部に鋭い突きを繰り出す。

たまらず昏倒する2人の警備兵であるトレーナー。それを見たアルトはジュプトルとフカマルに壁の中に入る事を視線で分からせ、搬入口の扉をくぐり壁に入る。

第5話 要塞攻略（前編）

壁の中に侵入したアルト達は、まずは壁の上部を目指す為に壁にかかっている通路を移動している。その際に壁に門のような物が見えた為、ここは巨大な海門である事を理解したアルトは自分のポケモン達を連れ海門の上部を目指す。

そして梯子を上り監視塔に侵入した時、要塞の職員の男にバツタリと出くわしてしまうが、

「ふっ！」

「ぐはあっ!?!」

アルトが素早く対応し男を殴り飛ばす。

殴り飛ばした男を一瞥して、アルトは右方にある鉄製の扉に気づく。

アルトは扉を開こうとするものの、鍵が掛かっている為か開かない。

後腰に差している剣を抜き扉を斬ろうとするも、それも弾かれてしまった。

「・・・壊すのは無理か」

扉の破壊を諦め仕方なく鍵を探そうとして剣を収めた時、アルトが殴り飛ばした男が起き上がる。

「侵入者ども！ワシの要塞をよくも・・・!!」

その顔は怒りに歪んでいるが、アルトは冷静だ。

「扉の鍵は何処だ？」

アルトの質問にも男は怒りを抑える事は無い。

「ワシは誇りある、聖導教会騎士だ！賊なぞに屈するものか!!」

男の外見は確かに中世騎士が身に付けているような鎧だ。

男が口にした「聖導教会」とは、統制管理局と提携しエヴァン地方における教会の中でも高位の地位を持ち、相応の高い権力を持っている。

実質エヴァン地方の治安はこの2つの組織によって守られていると言っても過言ではない。

アルトは軽く溜め息をつき、剣の柄を握りながら男に近寄って……
「ジュルイ」

ジュプトルに止められた。

「ジュプトル……？」

「ジュル」

任せろと言いたげに一声鳴くジュプトルに、アルトは下がり静かに剣の柄を離す。

そしてジュプトルは男と向き合うと、ゆっくりと歩みを進める。

そして静かに右腕の葉を光らせ、リーフブレードを展開する。

「お、お前！何をっ!？」

「ジュルイ！」

怒りから恐怖に染まり始めた男を余所に、ジュプトルは躊躇無くリーフブレードを振るう。

ブシュウツ!!

「いぎやああああっ!!？」

リーフブレードの振るわれた箇所——、男の左上腕から鮮血が飛び散る。

そのあまりの光景に、ジュプトルにくつついていたりオルは恐怖のあまり置かれていた木箱の裏に隠れてしまう。

ジュプトルは迷う事無く右腕のリーフブレードを、今度は男の首筋に持っていく。

男は悲鳴を上げる事も出来ず、ジュプトルの瞳はこう訴えているように見えた。

「もし従わなければ、命は無いぞ」と。

「ま、待て!!鍵は扉の奥にある管理室だっ!!」

恐怖に負けた男は、ついに鍵の保管場所を教える。

それを聞いたジュプトルはアルトと似たように軽く溜め息をつき、男を向き直させる。そして軽く跳ね男の顔面に回し蹴りを放ち気絶させる。

「……手間をかけたな」

ジュプトルに詫びるように言葉を送るが、ジュプトルは否定するよ

うに首を横に振る。

アルトは聞いた事に従い男が背にしていた扉をくぐり、ジュプトルとフカマルもそれに続く。リオルは恐怖からかその動きはぎこちなく身体は震えているが、それでもついていく。

扉の先は工事に使われたと思われる木製の細い足場だったが、ジュプトル達をポールに戻す事で足場への負荷を抑え、渡り切る事に成功する。

渡り切った先の建物を探ろうとするも、その分厚い扉には鍵が掛かっており、窓には鉄格子が掛かっている。

どう入ろうか思案していた時、

「カフーカフカフツッ！」

フカマルがボールから勝手に飛び出す。任せてくれと言いたげに自分の腹・・・と呼ぶには怪しいところだが腹をポンポンと叩く。

何を考えているのかアルトが真意を探ろうとした瞬間、

「カアフツッ！」

フカマルが窓の鉄格子に飛びつき、バキバキと大きな音を立てながら噛み砕いていく。

やがてフカマルがゲツプをし、食べ終えた後を見ると人が通れそうな程の隙間ができていた。

アルトはそれを見て、軽く笑みを浮かべフカマルの頭を軽く撫でる。その後にはフカマルを抱え鉄格子の隙間から建物内へ侵入する。

侵入し終わったアルトはもう一つのポールからジュプトルを出す。

「手分けして鍵を探すぞ」

「ジュール」

「カフ」

アルトの指示にジュプトルとフカマルは頷く。

手分けして鍵を探している時、リオルが何かを発見し取ろうと必死に背伸びをする。

「あった！鍵・・・」

ゴツンツッ！

アルトが鍵を発見したと同時に後ろから音が響いた。

「ウウ・・・」

後ろを向くと、そこには頭を抱え痛がっているリオルがいた。傍らには分厚い本が落ちている。

どうやらリオルはこの本を取ろうとしたところ、本が頭に落ちてきたようだ。

「ワウツ!?!」

アルトは本を拾いリオルの頭を軽く叩く。

リオルは短い悲鳴のような鳴き声を上げアルトに向く。

「我慢しろ、これくらいの痛み」

アルトはリオルに拾った本を渡す。

リオルは怯えながらその本を受け取る。

「ポケモンって、人間よりも長生きな筈なのに、人間の歴史が好きなんだな」

アルトは本を受け取ったりオルを見てそう言うが、リオルは難しそうな顔をする。

自分がどう思っているのか分からないのだろう。

そこへ同じく鍵を探していたジュプトルとフカマルが戻る。

鍵はアルトが入手した為、開門自体は出来るがアルト達は別の事を考えていた。

そして、次の目的を告げる。

「海門を開けても、このままだと船が迎撃される。そうなる前に砲台を潰す」

第6話 要塞攻略（後編）

管理室を後にし、次は大砲の発射台を目指すアルト達。

砲火は要塞の上部から見えた事を頼りに梯子を伝い上部に上っていく。

広い踊り場まで上って来たアルトを待ちかまえていたのは、1人の男。

「・・・トレーナー。つまり砲台はその先か、通してもらおう」

静かに男の素性を言い、警告するアルトに男は静かに腰に差している曲刀を抜く。

「貴様らは侵入者か？いや、どうでもいいか。賊に関する者は全て斬り伏せる」

男の言葉にアルトは後ろ腰の剣を抜く。

更に男はモンスタールボールを2つ放り、その中から「ストライク」と「キリキザン」が出現する。

「・・・ジュプトル、フカマル、今回は俺の指示無しで戦え」

静かなアルトの指示にジュプトルとフカマルは頷く。

バトル開始の合図代わりにダッシュで接近し斬りかかる男の剣をアルトが弾く音で開始される。

キリキザンとジュプトルはメタルクローとリーフブレードの打ち合いとなり、フカマルはとにかくストライクのれんぞくぎりを回避していく。

アルトは男の剣術を体術を織り交ぜた我流の剣技でいなしていくが、ジュプトルとフカマルは芳しくない。

ジュプトルは使える技の殆どはキリキザンと相性が悪く、フカマルも疲労からストライクの速度に対応できなくなってきた。

だが、フカマルが対応できず目を回し始めた時に、偶然避けたストライクのれんぞくぎりがキリキザンに直撃したのだ。

その事でストライクに腹を立てたキリキザンがメタルクローを、何故かストライクへ放ち、2体は喧嘩へと発展してしまう。

その様子をジュプトルとフカマルは固まった様子で見た後、フカマ

ルが充填を始める。

そして、充填を終えたフカマルが強力なエネルギー弾を2体へ放つ。

爆発の煙の中からダメージを負ったストライクとキリキザンが現れるも、瞬間ダツシユしたジュプトルがリーフブレードを急所に打ち込む。

ストライクとキリキザンは苦悶の表情を浮かべ、静かに倒れる。

アルトの方も男に回し蹴りを喰らわせ膝をつかせる。

そして剣先を向ける。

「誰から剣術を習った？」

「・・・聖導協会、クロガネ シグレだ」

“シグレ”。その名が出た事にアルトは反応。顔は険しくなり柄を握る手に血が滲み出るほど力が入る。

それを見たジュプトルが男に接近しバック転蹴りで顎を蹴り上げ気絶させる。

その様子にアルトは目を見開き驚いた様子を見せたが、ジュプトルが静かに右手を、血が滲み出ている手に添え静かに顔を横に振る。

怒りに飲まれるなど言いたげなその行動にアルトは冷静さを取り戻し、静かに剣を収める。

「・・・ありがとう」

「ジュルイ」

「カフーカフ？」

ジュプトルに続きフカマルも返事を返すが、その直後にフカマルの身体が光り出す。

その光はオルディンでジュプトルが発していた物と同じ。即ち・・・進化。

徐々にフカマルの身体が大きくなり、その姿は小型の肉食恐竜のような物になる。

「・・・ガバ」

フカマルが進化し変化したそのポケモンは・・・「ガバイト」。

その様子に小さく笑みを浮かべアルトはガバイトの頭を撫でる。

「ガバ」

ガバイトは一声鳴き笑みを見せる。
軽くガバイトを撫でた後、アルトは直ぐに表情を引き締め、砲台への扉をくぐる。

案の定中にも警備がいたが、ジユプトルと進化したガバイトがすぐに片付けた。

そして少ししてアルトが戻ってくる。

「ガバ、ガバ？」

ガバイトはどうやらどうやって砲台を潰すのか分かっていないようだ、アルトは最初から方法を決めていた。

「大砲の火薬を爆弾代わりに仕掛けた。手っ取り早いからこれをあいつらへの狼煙代わりにもする」

アルトの言うあいつらとは、船で待機しているラティアスとラティオスの事だろう。

一行が砲台から出て梯子を下る最中、頭上で爆発が起こる。
これで最後にやるべきことは、要塞の海門を開ける事だけ。

海門の位置は既に把握している。一行は最初に入った監視塔に戻り、鍵の掛かっていた重厚な扉を開ける。

あとは外の道を進み梯子を上る。丁度海門の真上に当たる位置に窓を発見した為、そこが海門の管制場所だと認識したアルトはその場所を目指す。

そしてたどり着いた。周りにはジユプトルとガバイトが待機しアルトの手には既に黒剣が握られている。

「・・・行くぞ」

「ジユル」

「ガバ！」

2体の準備完了の声を聞き、アルトが管制室の扉を蹴破る。

突然の事に職員達は混乱し、瞬く間に管制室は一行に制圧された。
「これか」

アルトは窓際にある管制装置にある並んだ2つのレバーを発見した。どうやら海門の開閉装置のようだ。

それを握り、一気に手前に引く。少しすると仕掛けの駆動音が聞こえ出す。

「どうやら無事に海門は開いたようだ。残るは船と合流し要塞を突破する。」

船着き場の位置を確認する為ジユプトル達を連れ要塞の屋根部分へ上る。

要塞全体を見渡し、船着き場を見つけそこへ向かおうとした時だった。

「あーっ！見つけたーっ!!」

第7話 覚悟

「あーっ！見つけたーっ!!」

突然大声が聞こえ、アルトが背後に向き直る。

そこにはアルトより歳下か同い年くらいの少女2人。1人は茶色シヨートヘアにセーラー服と紺色のスカート。もう1人は白いYシャツに緑の蝶ネクタイ、緑のミニスカート。

アルトを指差しているのは白Yシャツの黒いツインテールの少女の方だ。

「何だ？」

アルトは指を差される覚えがない為、思わずその少女に問う。

代わりに答えたのは隣のセーラー服の少女。

「あなたが黒の凶悪犯ですね！あなたのせいでエリオ君が大怪我しちゃったんですよ!!」

「エリオ・・・？」

「エリオ」という単語を聞き記憶を巡らせる。思い出すのにそう苦労はしなかった。

アルトはオルデインから脱獄する際にその男と戦ったのだから。

「・・・邪魔したから倒した。その何が悪い？」

「悪いよ！ちゃんとエリオに謝ってよ！」

今度は白Yシャツの少女がアルトに食ってかかる。しかしその際に見つけた。

2人の少女の服の襟元に輝く物、統制管理局のマークを。つまりこの2人の少女は管理局員。即ち・・・敵。

「邪魔した奴に謝る義理は無い。そこをどけ」

「ムキーー！じゃあ無理やり謝らせてやる!! やっっちゃお、ヨシカ!!」

「うん、ヴィスコンティちゃん！」

ヨシカと呼ばれたセーラー服の少女とヴィスコンティと呼ばれたYシャツの少女がモンスターボールを構える。

「お願い、エーファイ！」

「やっっちゃえ、ブラツキー!!」

「エーファイ！」

「ブラッキー！」

ヨシカのボールからはしなやかな体躯に二股に分かれた尻尾を持つポケモン「エーファイ」。

ヴィスコンティのボールからは漆黒の体色に黄色い輪の模様があるポケモン「ブラッキー」が繰り出される。

「・・・ジュプトル、ガバイト、バトルセット!!」

「ジュルイ！」

「ガバア！」

アルトの号令に背後で待機していたジュプトルとガバイトが前に出る。

2VS2のダブルバトル。その点では既にバトル慣れしているジュプトルとガバイトが有利だと思えるが、相手はエリオを知っている為油断は出来ない。

先陣を切ったのはヨシカのエーファイ。

「サイケこうせん！」

「ファイ！」

エーファイの額の赤珠からサイコパワーの光線が放たれる

「受け止める！」

「ガバア!!」

ガバイトが前に移動しサイケこうせんを受ける。ガバイトは苦悶の表情を浮かべるも受けきった。

「うそ!?!」

「リーフブレード！」

「ジュルイ！」

次に動いたのはジュプトル。両腕の葉を光らせエーファイに迫る。

「避けて！」

「ファイ！」

エーファイは跳躍し回避するが、それが隙となった。

「追撃しろ！」

「ジュル！」

リーフブレードを展開したまま上空のエーフィに迫る。

「エーフィ!!」

「ブラッキー、シャドーボール!!」

「ブラア!」

ヴィスコンティのブラッキーがエーフィを援護すべく黒い球体を形成し始めるが、アルトにも手の空いているポケモンはいる。

「ブラッキーにりゅうのいぶぎ!」

「ガバアアアツ!!」

ガバイトがすかさずエメラルド色のブレスをブラッキーに向け吐く。

「ブラア!」

「ああ!ブラッキー!」

ダメージを負ったブラッキーはシャドーボールの軌道を外してしまふ。

「ジュルイイ!」

「フィイイツ!」

その間にジュプトルがエーフィにリーフブレードを斬りつける。

「エーフィ!!」

「フィイ・・・」

地面に落ちたエーフィはふらつきながらも起き上がる。

「ヨシカ、エーフィ下がらせて!ブラッキー、もう1回シャドーボール!!」

「ブラア!!」

再び漆黒の球体を形成するブラッキー。今度は軌道を外す事無く打ち出すが、

「ガバアアアアツ!!」

ガバイトがエネルギー充填を始め、エネルギー弾を口から放つ。

2つの弾は互いに押し合い相殺される。

「ガバイト、お前いつの間に”りゅうのいかり”を?」
「ガバツ」

アルトの言葉にガバイトは振り向き笑みを見せる。

「だったら今度はあくのはどうをぶつけちゃえ！」

「ブラアア!!」

ブラツキーから悪意の波動が放たれガバイトへ迫るが、ガバイトはどこか余裕そうだ。

アルトに笑みを向け、アルトもまた笑い返す。

「もう1発りゆうのいかりをかましてやれ！」

「ガバアアアアツ!!」

再びガバイトからエネルギー弾が放たれあくのはどうと押し合いになる。

今回も相殺され爆発が起こるが、その爆煙から飛び出して来たのはガバイトではなくリーフブレードを展開したジユプトルであった。

「ジュルイイイツ!!」

「ブラアアアツ!?!」

ブラツキーにリーフブレードが直撃し、ブラツキーは勢いをもらいヴィスコンティの元へ吹き飛び、

「へ?うじゅあ!?!」

ヴィスコンティを巻き込み共に目を回した。戦闘不能である。

「ヴィスコンティちゃん!?!」

「余所見厳禁だ、ガバイト!」

「ガバツ!!」

いつの間にかエーフィに接近していたガバイトが両腕の爪を光らせた状態であった。

どうやらりゆうのいかり習得の際にエネルギー循環が上達したようだ。

ガバイトはそのまま光らせた爪“ドラゴンクロー”をエーフィへ繰り出す。

「フィイイッ!?!」

「エーフィ!!」

ドラゴンクローが直撃しエーフィはヨシカの下へと転がる。

「エーフィ・・・」

戦闘不能状態になったエーフィをヨシカは静かに抱きかかえる。

戦闘終了。勝利を収めたアルト達はもう1度船着き場を見るが、船着き場には砲台が爆発した時にできたであろう瓦礫が塞いでいた為、このままでは船に乗れない。

しかも着いたとしても瓦礫を退かす時間も無い。

ガバイトがどうすればいいのか頭を抱えている時、静かにアルトが口を開く。

「心配ない。船は海門を突っ切る。あいつらもきつと同じ事を考えてる」

そしてアルトの予想通り、船は今の状況を把握したのかラテイオスの操船で速度を緩める事無く真っ直ぐ来た。

「行くぞ」

この一声に一行は踵を返し反対側へ移動する。船は速度をそのまま海門に侵入。

まずジュプトルとガバイトが飛び降りた。

しかしそこで、戦闘不能だったはずのヨシカのエーファイが、ヨシカの腕から抜け額の赤珠にパワーを集め始める。

そして飛び降りたジュプトルへサイケこうせんを放つ。

「ワウ!？」

リオルがそれに気づくが、飛び降り無防備な状態のジュプトルに回避する術は無い。

咄嗟にリオルが動いた。

「おい、何を!？」

リオルの行動にアルトが驚愕する。

そしてリオルが跳躍しエーファイの放ったサイケこうせんの射線上に出る。

「ワウウウウツ!!」

「ファイ・・・!？」

ジュプトルを庇いサイケこうせんを受けるリオル。

エーファイは驚愕した後、力を使い果たし再び倒れる。

リオルは光線を受けそのまま飛ばされる。その先に足場は無い。アルトは既に走り出していた。

あの時は届かなかった・・・今度はもう何も無くしたくない。だから・・・!!

「届けええええっ!!」

左腕をめいっばい伸ばしリオルの右腕を掴み。右腕で剣を抜き壁に突き刺す。

「ふう・・・、お前は!」

「ウウ・・・」

リオルを叱るアルトだが、その顔には安心しているのか小さく笑みが浮かんでいる。

下を見るとジユプトルとガバイトが無事に船へ降りた。

「行くぞ」

アルトがそう言うと、壁を蹴り剣を引き抜いた。

「ウツ!?ウウウウウツ!!」

叫び声を上げるリオルと共に船へ落下していく。

そして船の帆がクツションになりそのまま甲板へ滑り降りていく。

この時刻を持って、アルト達は海門要塞を無事攻略し、ロサシテイへの歩を進める事になった。

要塞を突破した一行は現在、内海の航路を進んでいる。

「ウウ・・・」

リオルはどうやら叱られた事を気にしているようだが、アルトはしやがみ視線を近づける。

「よくやったな、お前」

「ウウ・・・?」

アルトは静かにリオルの頭に手を置き軽く撫でる。

その様子にリオルは戸惑っている。

「・・・身体を張ってジユプトルを守ろうとしたろ」

その言葉にジユプトルは軽く驚愕するような表情を浮かべる。

アルトが軽く説明し、そ理解したジユプトルもリオルに近づきポンポンと頭を軽く叩く。

「・・・ワウ」

リオルは小さく、しかし確かに笑みを浮かべる。少しずつ心を開いてきたようだ。

そんなリオルに、アルトは空のモンスターボールを渡す。

その行動にリオルは首を傾げる。

「お前の道だ。嫌なら捨ててもいい」

どうやらどうしたいかはリオル自身で決めさせるつもりのようなのだ。

アルト達が離れようとした時、リオルは決心した表情を浮かべ、モンスターボールのスイッチを押し自分から入っていった。

ボールは少しの間動き、・・・そして止まる。

リオルはどうやらアルト達と共に行く覚悟を決めたようだ。

アルトはリオルの入ったボールを拾い、中からリオルを出す。

「・・・よろしくな、リオル」

「ワウー！」

アルトの言葉に、リオルはこれまでの臆病さが嘘のように力強く頷いた。